



オランダ王国

派遣期間 2014年4月～2017年3月

ロッテルダム日本人学校 帰国報告

三笠市立萱野中学校

教諭 宮崎 智恵

1. オランダの概要

(1) 国名：オランダ王国

[英] Kingdom of the Netherlands

[蘭] Koninkrijk der Nederlanden



(2) 国土

[面積] 41,864km² (九州とほぼ同じ)

国土の約4分の1は海拔0m以下。

[緯度] 北緯52.3度 (サハリンとほぼ同じ)

[気候] ヨーロッパ地域は穏やかな西岸海洋性気候、カリブ海地域は熱帯気候。



(3) 人口：1,709.7万人 (2017年2月)

ゲルマン系オランダ人 83%

トルコ人, モロッコ人, その他の移民 17%

※在留邦人数 7,550人 (2015年10月)

(4) 首都：アムステルダム

(5) 宗教：キリスト教 40.2%, イスラム教 4.9%

無宗教・その他 54.9% (2015年)

(6) 公用語：オランダ語

国民の4分の3は母国語を含めた2か国語を話せるとされている。

(7) 政治

[政体] 立憲君主制

[元首] ウィレム・アレキサンダー国王陛下

[議会] 二院制 (下院に法案, 条約の先議権)

[首相] マルク・ルッテ (VVD)

(8) 経済

- 食品・家庭用品産業～ユニリーバ, ハイネケン
- 石油精製産業～ロイヤル・ダッチ・シェル
- 電器産業～フィリップス
- 農業～花卉類 (チューリップ等), チーズ, 野菜

(9) 文化

何事に対しても寛容であることが最大の特徴。だが, 自由な一方, 自己責任で行動しなければならない国だとも言える。以下は合法化されているが, 見直しの議論が続いているものもある。

- 同性婚
- 積極的安楽死
- 管理売春
- 大麻等のソフトドラッグの販売・所持・使用

(10) 教育

①教育の3つの自由：憲法で保障されている。

[学校設置の自由]

一定数以上の生徒を確保すれば, 特定の宗教や信条に基づき学校を設置することができる。

[教育理念の自由]

特定の宗教や信条に基づいて学校を運営できる自由。オルタナティブ教育など独自の教育方法を取り入れることもできる。

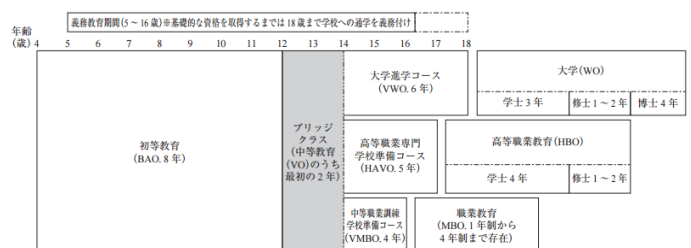
[教育方法の自由]

各学校が自らの方針に基づき, 各学校で教員を採用し, 各校で実施する教育方法に適した教材を創作・選択できる。

②教育制度

義務教育期間は, 義務教育法の規定により5歳の誕生日を迎えた翌月1日から16歳の誕生日を迎えた学年の修了までとされている。

図1 オランダの学校系統図 (普通教育)



年齢 (歳)

(i) 初等教育：5(4)歳～12歳

初等学校は義務教育年齢を迎える前の4歳から入学でき、保護者は公・私立学校の中から子供が入学する学校を選択する。「個々の子供が独自のスピードで学べるように」と考えるオランダでは、飛び級・留年が一般的に行われている。最終学年時には全国一斉テストが行われる。そして、校長が教員とともに子供の成績と適性を踏まえて、最も適切だと思われる進路をアドバイスするレポートを作成。テスト結果やレポートをもとに、本人・保護者・担任の三者で面談し、進学先を決定する。

(ii) 中等教育：12歳～18歳

初等学校で作成されたレポートは中等学校にも送付され、これを踏まえて中等学校は入学を許可する。

中等学校へ進学する際には、その後の大学や高等職業専門学校等への進学等を前提として、主に次の3コースに分かれる。

大学進学コース (VWO, 6年)
高等職業専門学校準備コース (HAVO, 5年)
中等職業訓練学校準備コース (VMBO, 4年)

「生徒が入学段階ですでに自分の能力にあったコースを選んでいる」という前提から、各コースで期待される達成度が決められており、その基準は前もって明らかにされている。学校が生徒の能力に合わせて基準を落とすことはなく、学校の基準についていけない生徒は下位レベルへの移動または落第が勧められている。

また、小学校卒業段階では自分の能力や将来の仕事についての動機づけがはっきりしない生徒も少なくない。中学校はじめの段階(2年間)でレベルの異なるコース間の移動をできるだけ容易にしようと、ブリッジクラスが設けられており、生徒が最終的に選択するコースを変更することが可能となっている。

(iii) 高等教育：18歳～

大学等への進学は、入学試験ではなく中等学校の各コースの修了資格によって決まる。一般に大学の学部には定員はなく、その年によって学生数は変動する。ただし、希望者の殺到する医学部は例外で、入試制度を取り入れる方向が検討されている。

③教育展示会

学校独自に教科書や教材を採択できるオランダでは、2年に1度、教育展示会が行われる。

教科書や教材をはじめ、校外学習先となり得る美術館や博物館等の施設紹介ブースや人権教育を行うための教育プログラムを提案するブース、教職員組合のブース等、学校・教育に関するありとあらゆるものが扱われており、オランダ各地から教職員が訪れる。中でもICT関連のブースが非常に多いことに驚いた。



2. ロッテルダム日本人学校

(1) 概要

[名称] ロッテルダム日本人学校

The Japanese School of Rotterdam

[設立] 1992(平成4)年4月1日

[設置者] 在蘭日本商工会議所(J.C.C.)

[ステータス] オランダ王国の法令に基づく学校

[運営主体] 財団法人 ロッテルダム日本人学校運営委員会

[地域環境]

学校は市の中心からトラムで約20分の閑静な住宅街にある。校舎はオランダ王国、ロッテルダム市、アメリカン・スクール(AISR)、日本人学校の共同出資により設立された国際教育センター(I.E.C.)にあり、AISRと共有している。



[学校教育目標]

豊かな国際性を身につけた21世紀に生きる児童生徒の育成

○思いやりのある人

○よく考え学びあえる人

○世界に目を開く人



[児童生徒数] 31名(平成28年度末)

学部	小学部						中学部		
	1	2	3	4	5	6	1	2	3
児童生徒数	3	4	5	6	6	5	0	1	1
計	29名						2名		

[教職員数] 13名(平成28年度)

文科省派遣教員8名, 現地採用教職員5名

[居住エリアと通学方法]

- ・ロッテルダムとその周辺
～徒歩, 自転車, 自家用車
- ・デン・ハーグ(ロッテルダムの北西, 約25km)
～スクールバス(約30分)
- ・ティルブルグ(ロッテルダムの南東, 約85km)
～スクールバス(約1時間)

[安全管理]

ロッテルダム市周辺・学校内外において騒乱, 暴動, 自然災害等が発生し, 児童生徒の身に危険が及ぶ事態を想定して「危機管理マニュアル」が定められている。緊急時には文部科学省や在オランダ日本国大使館, 学校運営理事会, A I S R等の関係機関と連携・協力する体制がとられる。

登下校時には教員が通用門で確認を行い, 不審者の侵入等に注意を払っている。

また, 火災や不審者侵入を想定した避難訓練を年4回, A I S Rと合同で実施している。

[教育課程]

- ・授業日数～200日
- ・年間授業総時数～1260時間
- ・日課表(小・中共通)

日 課	月～木	金
登 校	～8:30	～8:30
朝読書	8:30～8:40	8:30～8:40
朝の会	8:40～8:55	8:40～8:55
1校時	8:55～9:40	8:55～9:40
2校時	9:50～10:35	9:50～10:35
業間休み	10:35～10:50	10:35～10:50
3校時	10:50～11:35	10:50～11:35
4校時	11:45～12:30	11:45～12:30
昼食・昼休み	12:30～13:20	12:30～13:20
70分タイム	13:20～13:40	13:20～13:40
5校時	13:45～14:30	13:45～14:30
6校時	14:40～15:25	14:30～14:45
帰りの会	15:25～15:40	14:45～15:00
下 校	15:40～	15:00～

[主な年間行事] 平成28年度

4月	着任式・1学期始業式・入学式 新入生歓迎会, 日曜参観
5月	《中》1学期中間テスト 合同運動会 《小5～中3》水泳学習
6月	《小5～中3》水泳学習 新体力テスト, 歩け歩け大会 《中》実力テスト, 期末テスト 《小1～4》現地校との交流学习, 遠足
7月	《小5～中3》修学旅行 《小1～4》社会科見学 個別面談, 1学期終業式
8月	2学期始業式
9月	日曜参観 《中》実力テスト, 中間テスト 《小5～6》社会科見学
10月	秋華祭(学習発表会)
11月	高齢者施設訪問 《中》実力テスト, 期末テスト 《小》サンクス・ギビングデー
12月	《小》シントニコラス祭 個別面談, 2学期終業式
1月	3学期始業式 《小5～中3》特別支援学校訪問 《小1～4》水泳学習
2月	《小1～4》水泳学習, 現地校との交流学习 日本文化紹介 《中》学年末テスト
3月	卒業生を送る会, 個別面談 卒業式, 修了式・離任式

(2) 特色ある教育活動

①英語教育

オランダ人講師による指導の下, 各学年, 週に4コマ(1コマ20分)英会話の授業を実施。ゲーム的要素を取り入れながら, 児童生徒の発達段階や実態に応じて授業が進められている。

この講師は長年, 日本人学校に勤務し, 日本人気質をよく知っているため, 児童生徒が話しやすい雰囲気をつくりながら実践的な授業を行っている。



②国際理解教育

校舎を共有するアメリカン・インターナショナルスクール（AISR）と、教育理念や教育課程について共通理解を図りながら以下の3点を中心に交流活動を推進している。

(i) 教科における交流

生活科や総合的な学習の時間を中心に、英会話の時間に学んだ表現を用い、合同授業を実施している。



(ii) 行事における交流

感謝祭や日本文化紹介などを年間計画に位置付け、行事を通して自然なかたちで異文化に触れられるようにしている。



(iii) 学級活動や休み時間等における交流

学級活動の時間や昼休み等にカフェテリアやプレイグラウンド等で自由に交流できるようにしている。



③現地理解教育

(i) 現地校等との交流

小学部はヒルデガルト校・アンネフランク校（小学校）、中学部はセントローレンス校（中等教育学校）・ミチルスクール（特別支援学校）と行事や教科の授業を通して交流学習を行っている。また、地域の老人ホームと療養施設を隔年で訪問し、日本文化を通じた交流活動を行っている。



(ii) 校外学習

小1～4年の遠足や小学部の社会科見学等を、児童の発達段階に応じてオランダ国内の博物館や動物園、農場等でそれぞれ行っている。

また、日本大使館や現地の日本企業にご協力いただき、中学部では職業体験学習や進路講演会を行うことができた。

(iii) オランダ語学習

学校の設立条件としてオランダ語の学習が必須となっていないこと、また、「日本人にとってオランダ語の学習は難しく、英語に絞って学習した方がよい」というオランダ人講師の助言により、現在、「オランダ語」単体での授業は行っていない。しかし、オランダで暮らしていることや交流学習の際にも必要となること等から、オランダの行事や季節の風物詩を通して、簡単なオランダ語の授業を行っている。



(iv) 水泳学習

運河の国オランダでは、水難事故から自分の身を守るため水泳ディプロマの取得が義務づけられている。現地の小学3・4年生は年間を通じて毎週1回（30分）水泳を練習している。

日本人学校もこのプログラムに参加し、水に慣れるとともに専門指導員との関わりの中から現地理解を深めている。なお、ロッテルダム市の配慮により現地校同様、バスによる送迎や水泳指導を無償で受け、保健体育の授業の一環として実施している。



④学校行事

(i) 在オランダ日本人合同運動会

毎年5月、オランダ国内の日本人学校2校と補習授業校4校、そして、現地校やインターナショナルスクールに通う日本人の児童生徒が一堂に会し、合同運動会が行われる。児童生徒は紅白に分かれ、徒競走や団体種目、リレー等で熱戦を繰り広げる。

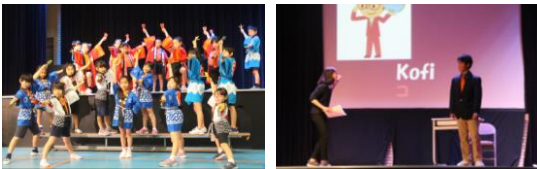
また、「彩」という表現活動があり、伝統的にアムステルダム日本人学校はソーラン節を、ロッテルダム日本人学校は和太鼓の演奏を披露している。新年度が始まると、小5～中3の児童生徒は和太鼓の演奏曲「マース河」の練習

を始める。リーダーが中心となってパート・全体練習を進め、その中で見通しをもつことの大切さや限られた期間内で精一杯努力することを経験させている。



(ii) 秋華祭 (学習発表会)

毎年10月末に、日頃の学習成果を発表する場として、小・中学部が、それぞれ音楽発表やステージ発表、表現活動を行う。また、最後には全校児童生徒、教職員による発表も行っている。



(iii) 宿泊的行事 (自然教室・修学旅行)

小5～中3を対象に、「実体験を通して、自分たちで考え、行動し、判断する力を身につける」ことを目的として、自然教室と修学旅行を交互に実施している(2泊3日)。

自然教室ではオランダ北部にあるテクセル島を訪れ、羊毛クラフトや乗馬などの自然体験を中心としたプログラムを行った。

また、修学旅行ではアムステルダムを訪れ、自主研修や日系企業への職場訪問を行った。国立美術館でオランダが誇る美術作品に触れたり、アンネ＝フランクの隠れ家を訪れ、平和について考えたりする等、貴重な機会となった。

どちらも教員が計画から下見、予約等の全てを行っており、教員自身の現地理解にも役立っている。



⑤ コミュニケーション能力の育成

赴任する前年度、言葉が通じない子との交流に不安感をもつ児童生徒が多くいたそうで、交流学習への指導過程で” Warm Heart ” というキーワードが生まれた。

” Warm Heart (温かい心) ” は以下の4つの態度がベースとなっており、他者と関わる際に大切な心として、交流学習だけではなく日常の活動を通して児童生徒への定着を目指した。



交流で一番大切なことは「自分の思いを相手に伝えたい」という心であり、そのための手段として「表情」や「ジェスチャー」、「言語」があるとの立場から、交流活動で使用する言葉を最小限に留め、表情やジェスチャーに重点を置いて指導を続けたところ、前向きに交流学習に臨む児童生徒が少しずつ増えてきた。

3. 3年間の実践を振り返って

「実践」と言えるようなことはできなかったが、派遣期間中に意識して取り組んだ4点について挙げたい。

(1) 国語科

① 語彙の指導

日本で暮らしていると自然に目や耳に飛び込んでくる日本語が、オランダで暮らしていると意識的に触れない限り目や耳に飛び込んでくることはない。児童生徒は家庭・家族、学校、本、インターネット(例: You Tube)等の限られた日本語の中で生活しているためか、日本の児童生徒よりも語彙が乏しい。また、生活経験から身に付いているはずの言葉を知らなかったり、慣用語やことわざでは、辞書的な意味は知っているものの使い方を誤って覚えていたりすることもあった。そこで季節の変わり目や年中行事等、機会を捉えて語彙を増やすことに努めた。

② 補習授業校への巡回指導

派遣1年目の教員が補習授業校の実態を知ることと、補習授業校の先生方へ指導方法等を伝えることを目的として、毎年、巡回指導を行っている。毎年同行し、ハーグ・ロッテルダム、マーストリヒト、ティルブルグの補習授業校3校で研究授業または授業参観をする機会をいただき、各学校で展開している特色ある教育活動を学ぶことができた。

(2) 家庭科

①調理実習

日本を離れて暮らす児童生徒は和食の食材が高かったり手に入りにくかったりすることが理由で、日本の家庭料理を食べる機会が少ない。そこで、教科書で扱われている和食をできるだけ調理実習で扱うよう心がけた。幸いロッテルダムには中国系の食材店があり、そこへ行けば日本の調味料などが比較的手に入る。仮になかったとしても、中華食材を転用することでだいたいの食材を揃えることができた。

また、派遣2年目以降はオランダの伝統料理を調理することにも取り組み、生徒がオランダ人講師にレシピを教えてもらうことから始めた。その際、なぜその野菜を使うのか、なぜその料理が生まれたのかなど、オランダの歴史の一端に触れさせることもできた。



②保育実習

A I S Rの日本語教室にご協力いただき、紙芝居の読み聞かせや手作りおもちゃで遊ぶなどの保育実習を体験させることができた。



(3) 生徒との距離感

特に中学部は少人数であることから、生徒同士で意見を出し合ったり、多様な意見に触れる中で考えを深めたりしていく機会をつくることが大変難しかった。また、生徒たちは保護者をはじめとする周囲の大人の影響を非常に受けやすく、狭い日本人コミュニティ内での人間関係づくりやストレスへの対処も、日本で生活している以上に難しそうに感じられた。生徒との適度な距離感を保ちつつ、ときには中学生の視点で話をしたり、ときには「教員・生徒」の枠を越え、同じ海外で生活する人間同士として話し合ったりすることもあった。

(4) 『ロッテルダム通信』

原籍校の学校長のご厚意により、生徒向けにオランダでの生活やイベント等を紹介した『ロッテルダム通信』を書かせていただいた。

1か月に1度、B4版2枚（2年目以降は1枚）に、オランダ生活で驚いたことや日本とオランダの違い、その時々での出来事などを写真とともに紹介した。生徒へ向けて書くことがモチベーションになり、3年間、書き続けることができた。また、自分にとってオランダ生活の記録となったことや、この通信を通じて交流することのできた人もいることから、書く機会を与えていただいたことに大変感謝している。



4. オランダでの生活について

(1) 住環境

オランダの家はフラット（マンションのような集合住宅）とローハウス（2～3階建ての一軒家で、隣同士がつながって建っている住宅）に分けられ、さらに家具付き・家具無しがある。新派遣教員は前年度のうちに、現派遣教員が探した家具付き物件の中から条件（家賃、立地、間取り等）に合ったものを選ぶことで、到着と同時に新生活を始めることができる。

家の前には運河等があり、水鳥が身近にいる。春にはヒナがたくさん生まれ、日に日に成長していくのを見ることができる。また、家の裏手には庭があり、そこにも鳥が多くいるため、一日中、鳥の声が聞こえ、自然を身近に感じた。

オランダ人の平均身長に合わせてか、ドアの高さは2m以上。天井も高く、間取りは日本では考えられないくらい広い。また、窓が大きいのにカーテン等を閉めないため、家の中はさらに開放的に感じられる。



(2) 食生活

①水

オランダは硬水のため、水道水に石灰分が多く含まれている。そのため、食器を洗って乾燥させると水滴の跡が白く残り、また、水に慣れるまで手荒れがひどかった。

洗濯をすると石灰分の影響で洗剤の泡立ちが悪く、特に白い衣服は洗っているうちに次第に黒ずむ。洗濯物の黒ずみを防ぎ、洗剤の泡立ちを助け、さらに水に含まれる石灰分が排水溝等に沈着しない成分を一緒に入れて洗濯する。

②食べ物

1年を通して野菜や果物、肉類など様々な物が店先に並び、特にチーズやヨーグルト等の乳製品、ハムやパンの種類は豊富である。魚の種類は日本よりも少ないが、サーモンやニシン、サバ、燻製のウナギなどがよく食べられている。ビールやワインは種類が豊富で安い。薄切りの肉はなく、専門店でお願ひすればスライスしてもらえる。卵は常温で販売されており、生で食べることはできない。

日本の食材は日系または中国系の店で買うことができ、オープンマーケットでは大根やもやし、しいたけ、柿等が買えるようになった。また、日本食ブームのおかげでスーパーでも寿司をつくるための材料（米、しょう油、寿司酢等）が売られるようになった。

なお、たいていの店は平日、18時に閉店。少しずつ営業時間が延長され、土日も営業されるようになってきた。サラダやパスタ等、手軽に食べられるお惣菜の種類も増えてきた。

(3) 気候

オランダの気候を一言で表すなら「雪のない北海道のような気候」である。夏でも30℃を超すことはまれで、湿度が低いので過ごしやすい。また、「オランダでは1日の中に四季がある」と言われるくらい、気温が変わりやすい。また、雨は日本のようにしとしと降るわけではないので、傘をささずに歩いている人も多く見られる。冬は朝晩の冷え込みが厳しく、車のフロントガラスが真っ白に凍りつく。これが繰り返されると、運河や湖が凍り、あちこちでスケートやアイスホッケーが始まる。派遣3年目に初めて運河が凍り、世界遺産のキンデルダイ

クでスケートをする人々を見ることができた。

オランダが日本よりも高緯度地方にあることを実感したのは日照時間の違いからであった。夏至の頃、午前4時には夜が明け始め、22時を過ぎてようやく日没。一方、冬至の頃には、朝9時になってようやく日が昇り、16時前には日が沈む。

(4) 交通

①公共交通機関

バス、トラム、メトロ、国鉄、水上バス等があり、どの乗り物も「OV-Chipkaart」というオランダ全国で使えるICカード型乗車券で乗車できる。

②自動車

自動車は左ハンドルで、走行車線は右側。道路は狭く、複雑に入り組んでおり、さらに交通ルールが日本とは違うことも多いため、運転に慣れるまで苦労した。しかし、オランダ国内はもとよりヨーロッパ全域にわたり高速道路網が発達しているため、都市間の移動は便利だ。高速道路に料金所は存在せず、無料で自由に使える。最高速度は区間によって90~130kmとまちまちで、混雑状況によって制限速度を変更する等して、渋滞を緩和している。なお、スピード違反には大変厳しく、1~2kmのオーバーで罰金が課せられることもある。

電気自動車用の充電器があちこちにあり、手軽に利用することができる。



オランダで運転免許証を申請し、取得すると、オランダ国内だけでなくEU圏内全域で運転できるようになる。また、自動車保険もそれに対応している。

③自転車

自転車大国であり、人口よりも自転車の台数の方が多と言われる、全国各地に自転車専用道路が整備されている。自転車を鉄道やトラム、船に載せることができ（別料金）、通勤・通学、レジャー等、様々な目的で人々は利用している。様々な種類があり、日本では見かけないタイプの自転車もあった。



(5) 医療

オランダの医療レベルは高いとされている。ロッテルダム市内や近隣の町には大きな総合病院がいくつかあり、どの病院も先進的な設備を誇っている。アムステルダムには日本人医師のいる病院があり、日本語で診療を受けることもできる。

医師は「ホームドクター」と「専門医」に分かれており、具合が悪くなったらあらかじめ登録したホームドクターに連絡し、診察予約をとる。どんなに具合が悪くても、予約なしではなかなか見てもらえない。ようやく診察してもらえたとしても「温かくして、しっかり休みなさい」と言われて終わることも多いようだ。ホームドクターの手に負えないとき等、大きな病院での治療が必要な場合は、適切な病院と医師を紹介してもらう。緊急の場合は救急車を呼べるが有料。当然、日本の保険制度は利用できないため、診察料は100%自己負担。

歯科の保険は他の保険医療と異なるため、歯の治療費は高額である。たいていのオランダ人は、半年に1度、定期的に診療を受けている。

(6) ゴミの分別

日本ではゴミの有料・分別回収が徹底されているが、オランダではゴミ処理税を納めると、あとはいつでもゴミを出すことができる（回収日は決まっていない）。また、分別は紙ゴミとビン、プラスチックぐらいだが、きちんと分別しないと罰金が課せられることもある。運河沿いや大きな通りにゴミの投入口があり、そこへ捨てる。



(7) 治安面

治安状況はそれほど悪くなく、注意を怠りさえしなければ日本と同じように過ごせる。しかし、近年、パリやブラッセル、ニース等、ヨーロッパ各地でテロ事件が発生しており、オランダ国内でもいつテロ事件が起こってもおかしくない状況が続いている。

空き巣や置き引き、スリ等が多く、犯罪件数全体の約7割を占めている。危険な区域では警察官の配置数が増やされ、常時パトロールする等して犯罪防止に努める一方、万一事件が起こったら即座に対処する体制が整えられている。

(8) 習慣・マナーなど

① 知人宅への訪問

手土産にはお花やワイン、チョコレート等を持参する。

② 誕生日

誕生日を迎える人が学校や職場へお菓子や果物、ケーキ等を持参し、友達や同僚に配る。

③ レストランでのチップ

通常、チップの必要はないが、お釣りの小銭を渡すのが習慣のようである。

④ トイレ

デパートやレストランなどのトイレは大半が有料で、50セント～1ユーロを支払う。

⑤ 寄付

オランダには寄付の文化が根付いており、様々な寄付を募るダイレクトメールが送られてきたりテレビCMが放映されたりしている。

また、年末になると新聞配達の子供たちがクリスマスカードを持って各戸を回るので、1ユーロ程度をあげる。

5. 終わりに

オランダ生活1年目は見るもの・聞くもの全てが目新しく感じられ、オランダのことを何でも見たい・知りたいと思った。2年目は日本のことを忘れないように、年中行事や和食など何かしら日本を意識して生活することを心がけた。3年目にはオランダの人を通して日本のことを見つめる機会が増え、自分は日本のことを知っているつもりだったが、知らないことがまだまだたくさんあるという現実を突きつけられた。

「帰国後は、歴史や文化、風習など日本のことをもう一度、勉強し直したい」と思っていたのに、帰国から半年以上が経った現在、毎日の業務に追われ、そのような余裕の全くない日々を過ごしている。

憧れを抱いていたヨーロッパ・オランダでの生活だったが、実際に暮らしてみると歴史や気候、風土、文化が異なるだけで、基本的な部分は同じなのではないかという気がした。オランダの人々は私たちと同じようなことで喜び、怒り、悲しみ、楽しんでいった。風車や広大なチューリップ畑は新鮮だったが、それらはオランダの歴史や風土などに基づくのであって、日本にも同じように誇れるものがあるのではないだろうか。外から日本を見る機会をいただいたので、これからは改めて日本の中から日本を見つめ直し、何らかの形で生徒へ還元していきたい。